

「甲南小學校水災記念誌」から

山つなみ 2年 八木幸一

七月五日の朝は、雨がざあざあと降ってみました。

お父さんが、「あんまり、雨がひどいから、自動車で行ったらどうだ。」とおっしゃいました。けれども、ぼくは「学校のお話があるから、自動車にはのりません。」といひました。

それでぼくは、お母さんと行くことになりました。

国道のバスにのつて学校に行きました。

学校の一時間目がすむと、先生が「雨がひどいから、かへりなさい。」とおつしやつたので、かばんをせおって、かうどうにならびました。さうして国道ぐみだけのこりました。

その時、南のうんどうばから、水が流れたのが見えたので、先生が「えうちゑんの二階に上れ」とおっしゃいました。

ぼくたちは、おかあさんと一しよに逃げました。

らうかの中ほどのはしらに来ると、水がひどくてせがたたなくなりました。

お母さんが、山口さんと武田さんとぼくをだいて、かさだなに上げて下さいました。

しかしすぐにかさだなが流れたので、あしばがなくなりました。

ぼくは一生けんめいにはしらにかぢりついてみました。

ぼくの下にお母さんが、およいでいらっしゃいました

とうとうはしらの上まで上って来ました。

水がどうくと流れて、ざいもくが1ばい流れて来ました。

そして山口さんや、武田さんが聲のかぎり

「助けて、をばちゃん、どうしよう、助けて。」といっていました。

そのうちにぼくの手がだるくなつて、ゆくがお母さん

「もうあかん。」といひました。

お母さんが、

「しっかりしなさい。きっと助けてあげる。」といはれたので、ぼくは元気が出て来ました。

はまの先生がぼくらに、

「がんばれーはしらをはなすな、がんばれー」とおつしやいました。

青年団の人が来てくれました。

「どうぞおねがひです。このかたのおじょうさんを ふじだなへ上げて下さいませんか。」

とお母さんがおっしゃいました。

すると、青年團の人と村田先生とで上げて下さいました。

そして大西先生が、ブランコにまたがらせて下さいました。

一番先に正ちゃんが、ブランコにまたがりました。

次に山口さんが渡りました。それから松井さんが渡りました。

その間に青年團の人にささへられて、はいのうをすてました。

はいのうは、またたくまに流れて行きました。

ぼくは「ものすごいなあ」と思いました。

そのうちに村田先生と手をつないで、ふじだなの上に上ることが出きました。

ふちだなから、やねへうつらうと思つて、やねの方へ行くと、下の方からお母さんが、

「好子、好子。」といはれました。

小さいねいちゃんはゐませんでした。

ふじだなからやねへうつつた時、ぼくは、おもはずうれしさに立ち上らうとしました。

すると、はまの先生が「立つな、たつな、はへ。」

と、ひつしで、おっしゃいました。

ぼくは、やねをつたつて二階のどから、さいほうしつには入りました。それからひとへの着物を着てみると、お母さんが、「おまもりどうした。」とおっしゃったので、ぼくはおまもりをさがしました。そのうちに、お母さんが、おまもりをさがして下さいました。

先生がさいほうしつがあぶなくなつたので、りかしつのまどから、つくを外へ出して橋を作って、をかやさんへ、ひなんさせて下さいました。

をかやさんで、千原君のゐないのに音がつきました。

ぼくが、先生に千原君がゐません。といふと、はまの先生が、

「あ〜、ひろちゃんがゐない。」とさけびなさいました。

そして手をくみ、首をかしげて、いらつしやいました。

ぼくは、をかやさんで着物を着て、おむすびをもらつたり、あまなつとうをいただいたりして、おなかをこしらへました。

をかやさんの所であそんでいると、お父んさがどろまみれになつていらつしやいました。

お父さんがをかやさんで、着物に着へなさいました。

しばらく休んでみると、はまの先生が「学校へ集まれ。」と、おっしゃいました。

ぼくらは学校の二階へ集りました。

さうしておむかへが来る人だけかへりました。

みんなとくしょしつで、おにぎりとおちゃをもらひました。

よこのさんは、「弟がゐない。」といつて泣いてゐました。

お父さんは、女学校へ大きいねえちゃんをむかへに行かれました。

しばらくすると、お父さんがかつていらつしやいました。

学校のかいだんを上る所をふむと、ずるずるとはいります。

「えうちゑんのおべんたうをたべる所は、すっかりどろでうづまつてしまいました。

かうどうの中も、もうちょっとで、やねにつくほどにうづまつてしまいました。

ぼくはそれを見てびつくりしました。

こくどうには、トラックがたくさんうづまつてゐます。

こくどうはまだ、「ごうごう。」といきほいよく水が流れてゐます。

こく道は内へ水が入らないやうに、たたみでかこひがしてあります。

すみよし川は、大きな石で一ばいです。

学校のことを思うとゆめ見たいです。

千原君のことを思ふと、なんとなく涙が出てきます。

そしてばんねてぼくは、うなされて、一ばん中手をあはせてとびおきてばかりゐました。